

雲南省の神像呪符『甲馬子』(ジャーマーツ)と民間信仰の世界

川野 明正
(明治大学)

1. はじめに

かつて中国では神々の像を粗末な紙に刷った版画があり、さまざまな年中行事や祖先祭祀、あるいは日常生活で必要となるさまざまな願い事に使われていた。この種の版画は、「紙馬」、^{キンマー}「神馬」、あるいは^{ジャーマーツ}「甲馬子」(雲南省での呼称)(図1)とも呼ばれ、願い事の対象となる神に祈りを捧げ、紙で出来た模造銭「紙銭」とともに火をつけて燃やし、煙とともに幽明を異なる神々の世界や死者の世界に人々の願いを伝えてきた。この種の版画は、神々や死者と交流するための通信手段で、中国の人々の信仰を支える大切な冥界通信メディアであった。

雲南省には、台湾・香港・あるいはシンガポールなどの華人社会を除いて、他の地方ではほとんど姿を消したこの種の神像版画が、日常生活の随所で使われており、今日でもさまざまな民俗神や鬼怪たちの民間信仰の有様を現代に伝えている。

神像版画を伝える人々—雲南省の三分の二の人口を占める漢族・雲南省西部大理白族自治州(以下大理州と表記)を中心に居住するチベット・ビルマ系の少数民族、ペー族(白族と表記・チベット・ビルマ語族ペー語支)・ナシ族・イ族(昆明周辺サメ人・子君人など)・リス族(以上チベット・ビルマ語族イ語支)・チベット族(チベット・ビルマ語族チベット語支)。

雲南省全体で40の市や県にわたる(地図1参照)。

・宋・孟元老の『東京夢華録』(北宋の都、開封の生活を回顧。春の墓参行事である清明節の記述)「紳士も庶民も墓参りに出かけるため、都の門は人で塞がりそうな有り様になる。どこの紙馬舗でも、紙の張ぼて細工で楼閣の格好を作ったのを通り道で売り出す」(巻七「清明節」)[入矢・梅原 1996:231-232](以下、引用文献名は文末の参考文献表に掲載した)。

・中華民国期に浙江省の^{マージン}「馬張」と呼ばれる神像呪符を調査したデイによれば、当時販売者一軒あたり年間一万枚の神像を生産していたという[Day 1940:5]。

2. 紙馬類の起源——神像版画・呪符・紙銭

木版神像画—唐代、咸通九年(868年)刻印の『金剛経』の巻首に描かれた「釈迦牟尼説法図」や、成都で製作された『陀羅尼咒本』が木版神像画の最古のものとして知られる。

呪符—敦煌文書『護宅神曆卷』(ペリオ三三五八)に載せる「安心符」「樹神符」などで、樹神や駆鬼の神像を手描きしている(陶思炎氏の指摘)[陶思炎 1996:10](図2)。

紙銭—神や祖先などに対して捧げる模造銭。「燃やして使う」という共通点。

『新唐書』卷一百九「列伝」第三十四「王珣伝」^{おうよ}「漢代以来葬祭には皆瘞^{えいせん}銭があり、後世の里俗では紙を銭に寓して鬼事(死者の祭祀)に用いた」(瘞銭は銭を埋葬の際にともに埋め、死者の用とした。魏晋の頃より行われ、この種の模造銭は、遅くとも宋代には燃やして使用する習俗が盛ん)。

雲南でも西部の大理州大理市喜州鎮、あるいは中部の昆明市では「紙火」と呼び、紙銭を意味する。紙馬類に描かれた神像は、いわば祈願の対象となる神を記すことにより、紙馬類を燃やす際の「宛先」として機能している[川野 2005a:221-223]。

3. 「馬」に託された人々の願い

「馬」という字が含む意味。日本の絵馬との共通性。

a. 紙馬の依代としての性格

明末清初・^{ぐちゆうりゆう}虞兆隆の『天香楼偶得』は、紙馬の解釈として、「世間では紙に神仏の像を描き、とりどりの色に塗り、祭祀に使用しておわれば焚く。これを甲馬といい、この紙を神の^{よりしろ}依代とするが、馬に似る」(「馬字寓用」)

b. 馬を神々の乗り物にするという説

清・^{おうとう}王棠『知新録』卷八(『辞源』に引く)「唐の明皇(玄宗皇帝)鬼神を瀆し、^{おうよ}王珣紙を以て幣^{へい}となし、紙馬を用いて以て鬼神を祀る。すなわち^{ぐうば}禺馬(木製の馬)遺意なり」。

唐代の歳時記、『^{れんか}輦下歳時記』(著者不明、『説郛』卷六十九収録)かまど神の祭祀に使う^{そうば}「竈馬」の記述。「都の人たちは、年夜(除夜を指す)となれば僧侶や道士を呼んで経を唱えてもらい、酒と果物を供えて神を送る。^{そうば}竈馬をかまどに貼り、酒糟を竈門のうえに塗る。これを^{すいしめい}酔司命という」。

かまど神は一名「^{しめいそうくん}司命竈君」といい、年の暮れに天に上がり、天上にある神々の朝廷に赴いて、家庭の一年の行いを報告する。

・明末清初、^{いんあんさご}王逋『蜩庵瑣語』の目撃談。

「世俗の祭祀では、必ず紙銭、甲馬、雲鶴(神の乗騎とする鶴を描いた版画)を燃やす。少しでも見識のある者はみな、無益な物であるという。近頃私は^{きゅうりゆうさん}穹窿山(現在の江蘇省呉県境内)に行き、施煉師(名は亮生・道士)が、温元帥(道教の神。四大元帥の一位)を招いて下して童子の身体にのりうつらせたのを目にした。祭祀が終わって去っていたが、甲馬をつづけて数枚燃やしたが、帰ってくれなかった。施煉師が、馬はたくさん献じたはずであるといったが、温元帥がいうのには、馬の足に欠陥があるので、乗騎とするのに役立たないという。そこでまだ焼いていない図版をみると、その部分の版木が折れて壊れており、馬の足が断たれてつながっていなかった。そこで筆で描いてつなげると、元帥は去った」。

4. 雲南省の神像版画「甲馬子」

a. 雲南での甲馬子の歴史

現存の版木でもっとも古い物は清代の乾隆(1736~1795)・嘉慶年間(1796~1820)のもの。

[李偉卿 1988:33]。雲南省の甲馬子が分布する地域は、雲南中部の省都昆明、中南部の通海、南部の建水・石屏、西部の大理、保山、騰衝などの都市とその周辺の農村であり、漢族居住地が中心である。明末から清初にかけて、雲南でも木版印刷による出版業もようやく定着する。もともと移民である雲南漢族が、日常生活の必要から、これらの神像版画を内地での習俗にもとづいて生産したことが、甲馬子の起源であろう。

b. 神像版画の制作と販売(主に写真を中心に解説します)

雲南の甲馬子は、自由奔放ともいえる造形が持ち味である。これは一方で、当事者たちが、現地で必要となる民間信仰上の神を、必要に応じて版画化する必要があったこととも無縁ではない。甲馬子の販売者は、農民が多く、各地に立つ市で行商したり、市街にある紙製品の販売店に卸して売るか、あるいは紙製品店の経営者が版刻して売する場合もあるが、いずれも現地の人々や周囲の少数民族の信じる民俗神と祭祀習俗を反映したものを販売している。とくに大理地方のペー族の間に使われている神像版画などは、もともと見本となる神像などあるはずもなく、ペー族の製作した甲馬子には、ペー族独自の前掛けと頭巾の民族衣装を着た民俗神たちが、ときには踊り、ときには微笑み、ときには怒りの表情を浮かべて生き生きと描かれている。版木の制作は今日も行われ、ナシの木の版木に大理石の彫刻などに使う小刀で彫る。それを粗末な雑紙を版木の上に乗せて、シュロの木の皮のばれんで刷ってゆく。

具体例

保市山騰衝の許家紙舗にみる作坊(工房)

騰衝ではこの種の神像版画を「神馬」(シェンマー)と呼んでいる。文物管理所の 賈志偉氏の話によると、いちばん古いものは道光二十七年(1847)で、「文昌帝君」を描く物である。

中華民国の時代には、いくつかの作坊があった。かつて固永・明光・古永・南片・盈江などで販売されていた。許家紙舗は、許多禎が民国期に他の紙舗の手伝いをし、のちに独立した。文革のときには中断していたが、1980年に許洪玲(女・44)の兄、許存孝と嫂の段生英(80)が1980年になって、ふたたび神馬の販売をはじめた。騰衝でいちばん古い紙舗は、「金發号」で段金廣がはじめて6代目であったが、いまは神像の販売はしていないという。

5. 甲馬子にみる祈りの世界

(この部分は点数が多いので映写図像をもとに解説します)

6. むすび

参考文献

邦文文献

岩井宏実——1997『絵馬』東京:法政大学出版局

入矢義高・梅原郁(訳注)・(宋)孟元老(著)——1996『東京夢華録——宋代の都市と生活』東京:平凡社

川野明正——2005a「天翔る馬——中国馬像呪符をめぐる民俗」『東京理科大学紀要(教養篇)』第 37 号:215-231 頁

川野明正——2005b『神像呪符「甲馬子」集成——中国雲南省漢族・白族民間信仰誌』大阪:東方出版

蘇素卿——1999「台湾漢族における祭祀活動と紙製品の研究——主に金銀紙を中心にして」『比較民俗研究』第 16 号、筑波大学比較民俗研究会:47-104 頁

吉田隆英——2004「紙馬の研究——東アジアにおける宗教的印刷物の発展・流通と神の使者としての馬」磯部彰 編『東アジア出版文化研究——にわたり』東京:二玄社:369-381 頁

金井忠夫(編)——2007『春節の祈り 中国・年画と紙馬の世界』那須:那須塩原市那須野が原博物館

漢語文献

李偉卿——1988「大理甲馬与白族民間諸神」『雲南民族学院学報』28-33 頁

陶思炎——1996『中国紙馬』台北:東大圖書股份有限公司

王樹村——1992『中国古代民俗版画』北京:新世界出版社

馮驥才——2007『中国木版年画成・雲南甲馬卷』北京:中華書局

欧文文献

Day, C.B.——1940 *Chinese Peasant Cults——Being a Study of Chinese Paper Gods*, Shanghai: Kelly and Walsh Limited. 等